

た。  
以上、不十分ながら紹介と、感想を述べさせていだいた。

(月澤美代子)

〔時空出版、東京都文京区小石川四一八一三、電話〇三三三八二一五三一三、二〇〇〇年三月二八日発行、菊判、二五二頁、定価三四〇〇円〕

小松 良夫著

『結核——日本近代史の裏側』

我が国の結核患者の新発生数も罹患率(人口一〇万あたりの年間新発生患者数)も、最近減少速度が鈍化してきたとはいえ、ともかく減少し続けてきた。しかし、一九九七、九八、九九年の三年連続して増加に転じ、学校・病院・高齢者施設・事業所などで結核の集団感染・集団発生が頻発している。このような状況のもと、厚生省は一九九九年七月「結核非常事態宣言」を発表し、国民全般および関係諸団体に「結核の問題を再認識し、対策の推進に取り組むよう」要請した。このように「結核の再興」が論議されているとき、小松良夫氏によって『結核——日本近代史の裏側』が出版された。時宜を得た出版であり、広く読まれることを期待したい。

副題の『日本近代史の裏側』にこめられた小松氏の意企あ

るいは心情は、小松氏の自序によって明確に知ることができ  
る。「明治新政府が樹立されたのは一八六八年で、一三〇年あまりが経っている。この間、二つの大きな出来事があった。一つは「戦争」で、一つは「結核」である」と言い切る小松氏の言葉は鮮烈である。これまでにも「結核は社会病である」とか「結核は資本主義を象徴する病気である」などの表現は、半ば決まり文句のように多くの人によって使われてきたが、明治以降一三〇年の日本近代史を「戦争」と「結核」という二つのキーワードで裁断したのは小松氏をもって嚆矢とするであろう。この小松氏の史観は、殆ど独力で収集された学術書から啓蒙用パンフレット・患者の病床記にいたる豊富な資料によって裏づけられており、他方、「若い人々が逝くなり、傷つき、人生を大きく変えてしまう」原因となった「戦争」と「結核」に対する激しい怒りに支えられていると思われる。「戦争」と「結核」によって生命を奪われた若者たちへの哀惜の念は、御次男を失われた小松氏の鎮魂の情と結びついて、この著書に結晶したと拝察できる。

経済的先進諸国のうちで、第一次または第二次世界大戦後減少し続けてきた結核が再び増加し始め、「結核の再興」を経験したのは日本が最初ではない。アメリカ合衆国でも一九八五年から結核罹患率の逆転・再上昇がみられた。アメリカの場合、責任行政組織であるCDCが「結核再興の最大の原因は、結核問題の軽視からくる予算の削減とそれに伴う公衆衛生下部組織の崩壊である」と率直な自己批判を行い、結核

関連予算を数倍にも増額し、感染性排菌患者の早期発見と「直接監視下の強化化学療法 (DOTS)」を軸にした「危機管理的」な対策を迅速に実行して「結核再興」を克服した。我が国でもこのような対応が可能かどうか懸念が残る。

もう一つの懸念は、結核対策・研究・医療の第一線を担っている人たちが、CDCやWHOのガイドラインなどはよく勉強している反面、小松氏も詳述されている我が国の先輩たちの達成した成果を無視する傾向である。優れた先輩たちの確立した「初感染発病学説」とそれに基づく結核対策の理論とは、大筋において正しかったと考える。

行政・疫学・臨床・基礎研究のどの分野にしろ、結核の領域に関連しているすべての人に、小松氏のこの著書を読んで貰いたいと思う。そして、我が国の結核病学の到達点と、それを結核対策の現場に必ずしも生かせなかった我が国の政治・行政の貧しさを知って欲しいと思う。CDCやWHOのポリシーやガイドラインは、そのうえで我が国の実情にあわせて取捨選択すべきであろう。

最後に、小松氏は殆んど独力で収集され、この著書の基礎ともなった貴重な資料を「杏医療資料館」として公開されている。資料収集にかけられた大変な御苦労と、それを公開される御宏量に対して、書評の場を借りて、小松氏に感謝と敬意を表わしたい。

(兼松 一郎)

〔清風堂書店、大阪市北区曾根崎二一十一一十六、電話〇六一〕

六三一六一四六〇、平成十二年五月一日発行、A5判、四二五頁、定価本体六八〇〇円)

岡田 靖雄 著

### 『歴史から見た日本の精神科医療の問題点』

『ひとは特定の間人や事柄との関連で起こることの一切について責任がある。…責任は出来事の構造の中に前もって示されている (Georg Picht, 1969)』

責任とは何かについて考えてみたい。ナチスの障害者安楽死計画を遂行した医師たちの行為は決して他人事ではないからだ。未だ裁かれない関東軍七三一(石井)部隊の医師たち、水保病の責任回避に加担してきた医師たち、薬害エイズ関係者、精神病院不祥事件を引き起こしてきた人たち、そして事件にまでは到らない程度のおびただしい医療行為の数々。これらについて、ひとり一人の医師には、おのれの問題としての歴史的総括が問われていると思う。しかも総括すれば全てが落着くようなものでもなかろう。歴史的責任は、未来にわたって応えていかななくてはならないからだ。考えてみれば、おのれ自身の行為を歴史的展望のもとに、責任という観点から追求し続ける人がこの国では少ないのではなかろうか。

歴史を踏まえながら責任についてつねに追求し続けている岡田靖雄氏は、今更言うまでもないが、精神科医療史研究の